様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年４月２０日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００９～２０１１
課題番号：２１５２０３１９
研究課題名（和文）　カリマコス　―　ヘレニズム文学の様相とその意義

研究課題名（英文）　Callimachus - The Aspects and Meanings of Hellenistic Literature

研究代表者
安村　典子（YASUMURA　NORIKO）
金沢大学・人間科学系・客員教授
研究者番号：２０２９３３７６

研究成果の概要（和文）：
本研究は、ヘレニズム文学の至宝、カリマコスの諸作品を研究し、（１）カリマコス詩歌の文学的意義を考察すること、（２）カリマコスを中心とするヘレニズム文学の特質について考察すること、（３）カリマコス並びにヘレニズム文学が後代に与えた意義を究明すること、主としてこの三点に焦点をあてて考察した。
カリマコスの作品は、神々への『讃歌集』６編と『起源物語』、それに風刺詩の断片が残るのみである。いずれの作品もいまだ日本語に翻訳されておらず、その研究もほとんど行われてこなかった。本研究では、これらの作品を初めて日本語に翻訳し、それらが緻密で文学技巧を駆使した薫り高い文学であることを研究した。これにより、古典文学に関心を抱く人々にカリマコス文学の全容を提示するものである。

研究成果の概要（英文）：
The aim of this project is to study the works of Callimachus. For this aim, the following themes are focused on; (1) the meanings and the value of his poems, (2) the characteristics of Hellenistic literature, (3) the effects of his works to the later literature. The intricate and intellectual aspects of Callimachus are discussed as the prominent characteristics of his works.
As any works of Callimachus have not been translated into Japanese so far, the translation of his works is attempted, which will be published from Kyoto University Press in future.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：カリマコス、讃歌集、起源物語、テオクリトス、ヘレニズム文学、ギリシア文学

１．研究開始当初の背景

本申請者は、これまでギリシア古典の中で

も最も古い時代の文学作品、すなわちホメーロス研究、ヘーシオドス研究を行い、その中に登場する神々の諸相、神話の意味するところなどを考察してきた。その結果、時代が下ってヘレニズム時代となり、古代社会とは異なる新しい世界が展開したときに、従来の文学はどのような変遷を遂げたのか、神話の受容はどのように変化したのか、そしてヘレニズム文学の精神は全体としてどのようなものであったのか、などの問題に強い関心を抱くにいたった。ヘレニズム時代の文学者の中でも、最もヘレニズム精神をよく体現しているといわれるカリマコスこそ、本申請者の研究対象としてふさわしいと考えた。彼の文学の精緻をつくした作風を解明し、彼を通してヘレニズム文学の様相を探ることを目指した。

カリマコスは紀元前４－3 世紀に、プトレマイオス２世治下のアレキサンドリアの宮廷を舞台に活躍し、数多くの文学作品を残した詩人である。古代の辞典（スーダ辞典、紀元後 10 世紀）によれば、カリマコスは８００作余りの詩を書いたといわれ、ヘレニズム文学を代表する詩人・文学者であった。しかしながら今日ではその作品の大半は失われており、わずかに六編の讃歌集（『ゼウス讃歌』、『アポローン讃歌』、『アルテミス讃歌』、『デーロス島讃歌』、『アテーネー讃歌』、『デーメーテール讃歌』）と、祭や風習の原因・起源を語る『起源物語』、それに風刺詩とその断片が残るにすぎない。

これらの作品の特徴としてはまず第一に、いずれも比較的短い詩形であることが挙げられる。当時は『イーリアス』や『オデュッセイア』などのホメーロス叙事詩を模倣した、伝統を追随する長い叙事詩を作る者が多かった。カリマコスはこのような過去に依存する旧態依然の文学様式を退け、新しい詩形を追求したのである。その結果カリマコスが最も得意とし、最上の詩形と考えたのは、技巧を尽くした短い詩形であった。すなわち冗長な物語構成を退け、短い全体像の中に珠玉の精髄を込めること、それこそ彼がめざした文学であった。

第二の特徴として挙げられるのは、カリマコスの原因・起源追求の姿勢である。讃歌集やとりわけ『起源物語』において、神々の神話、宗教儀礼、祭祀などの起源を追及し、そこに、それぞれの神がもつ特性の根拠を見出そうとした。このような作風は、ヘーロドトス（紀元前５世紀）の「原因追求」の精神を彷彿とさせるものである。カリマコスは文学様式の革新をめざす一方で、ギリシア古来の価値観を評価し保持する姿勢を併せ持っていたことがわかる。

第三の特徴は、彼の詩がいずれも優れて知的であることである。ギリシア古典古代の文学作品の暗喩や比喩を駆使し、緻密な構成と表現を用い、学者としての彼の博識をうかがい知ることができる。詩人でもあり学者でもあったカリマコスの作品らしく、それらは時に「知的な遊び」と称されることもある。これらは従来のギリシア文学には見られない新しい傾向として、その文学的効果や特質について、深く究明することが必要である。

２．研究の目的

本研究はヘレニズム文学の至宝、カリマコスの諸作品を研究し、（１）カリマコス詩歌の文学的意義を考察すること、(2) カリマコスを中心とするヘレニズム文学の特質について考察すること、（３）カリマコス並びにヘレニズム文学が後代に与えた意義を究明すること、主としてこの三点に焦点をあてて研究することを、その目的とする。

カリマコスの作品は、きわめて魅力に富んで

いる。しかしながら日本では、これまでカリマコス研究はほとんど行われてこなかった。彼の詩の中で日本語に翻訳され出版された作品が何ひとつ存在しないということは、この偉大な作家がこれまで日本においていかに注目されてこなかったか、という事実を雄弁に物語るものである。そこで本申請研究においては、彼の作品の日本語訳を完成し、その文学的価値を十分に究明する。

３．研究の方法

（１）研究期間内の計画実施

研究の初年度には、主としてカリマコスの現存作品の翻訳を行った。学術的ともいえる彼の作品は、その真意を理解するためには膨大な訳注を付けることが必要であるので、そのための研究も行った。

研究の２年目には、翻訳と訳注を推敲し、更にカリマコス文学の特質について調査研究した。

研究の３年目には、カリマコスがヘレニズムの時代の精神をどのように映し出しているか、カリマコス以外のヘレニズム作家との関わりはどのようなものであったのか、などの点について研究した。

（２）関連部門の国内の研究集会への参加

京都大学、慶応大学、国際基督教大学などで開かれた研究集会への出席し、研究者との討議、意見交換により、カリマコス文学についての考察を深めた。

（３）内外の研究者を交えての情報交換・討論会の開催

２０１０年１０月に、イギリス・ケンブリッジ大学のジョイス・レノルズ博士を招き、国内の研究者を交えて討論会を行った。これにより、カリマコスの文体や主題などに関して問題の所在を明らかにし、その考察に明確な方向性を得た。

４．研究成果

本研究により、次のような成果が得られた。

（１）日本における従来の西洋古典学研究は、ギリシア・ローマの黄金時代、すなわち紀元前８から４世紀までのギリシアと、紀元前１から紀元後１世紀までのローマにおいて生み出された作品に、研究の主眼がおかれていた。このため、その中間に位置するヘレニズム文学（紀元前３－2 世紀）に眼を向ける機会が乏しく、研究業績も多く残されているとはいえない。本研究ではこのヘレニズム文学に脚光をあて、その魅力を新たに発掘した。

（２）カリマコスの文学的技巧を明らかにし、彼がギリシアの伝統をふまえた上で独自の革新を追及した、その様相を考察した。カリマコスの文学的技法のうち、とりわけ、隠喩、比喩は彼の文学の中核をなすものであり、これらについての詳細な研究を行った。

（３）カリマコスの現存する全作品を初めて日本語に訳し、それを将来出版することによって、西洋古典研究者のみならず、ギリシア古典文学に興味を抱く人々に、広くカリマコス文学の全容を提示する予定である。

（４）ヘレニズム文学の中心に位置するカリマコスを研究することにより、ヘレニズム文学の特徴の一端をとらえ、その時代の文学的素地を明らかにした。

（５）ヘレニズム文学がそれ以前のギリシア文学をどのように受容し、また変革したのか、またそれはその後のローマ文学にどのように引き継がれたかを考察し、ヘレニズム文学の位置づけを明確にした。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 安村 典子,「テオクリトス『牧歌』とその先駆者たち」，ペディラヴィウム研究別冊，査読無，2012 年発行予定

② 安村　典子,「アイギスーゼウスとアテーナーをめぐって」，西洋古典論集（京都大学西洋古典研究室），査読無，22 巻，2010 年，22-37 頁

〔学会発表〕（計１件）

① 安村　典子,「父と子の問題―『イーリアス』におけるペーレウスとアキレウス」，国際高等研究所・研究会「近代精神と古典解釈」，2010 年 11 月 26 日，けいはんな国際高等研究所（京都府）

〔図書〕（計４件）

① 安村　典子,「オデュッセウスの自伝的物語―『オデュセイア』の虚と実の間」、国際高等研究所、『近代精神と古典解釈』、2011，（共著、第３部４章、１９１－２１１頁を担当）

②Noriko Yasumura, *Challenges to the Power of Zeus in Early Greek Poetry*, Bristol Classical Press, 2011, 223 頁

③安村　典子，岩波書店，『ギリシア喜劇全集』８，2011，（共訳，ダーモクセノスからディーピロスまで 192-281 頁を担当）

④安村　典子，岩波書店，『ギリシア喜劇全集』４，2009，（共訳、『プルートス』90-190 頁を担当）

６．研究組織

(1)研究代表者

安村 典子（YASUMURA NORIKO）
金沢大学・人間科学系・客員教授
研究者番号：20293376